

〔研究報告〕

ライフストーリーの語りを生かした入退院支援の実践者育成に向けた
方策の検討藤澤 まこと¹⁾ 加藤 由香里¹⁾ 柴田 万智子¹⁾ 普照 早苗²⁾ 黒江 ゆり子³⁾Consideration of Measures to Train Practitioners to Support Hospital
Admissions and Discharges by Utilizing Life Story NarrativesMakoto Fujisawa¹⁾, Yukari Kato¹⁾, Machiko Shibata¹⁾, Sanae Fusho²⁾ and Yuriko Kuroe³⁾

要旨

本研究では、ライフストーリーインタビューの知識・技術修得のための教育支援として、A 県看護職者を対象に研修会（以下研修会）を企画・開催し、ライフストーリーの語りを生かした入退院支援の実践者（以下実践者）育成の課題を明確化し、実践者育成の方策を検討することを目的とする。

講義・実践的ワークを含む研修会を企画・開催し、研修会終了後に参加者を対象に学び等に関する質問紙調査を実施した。調査内容は、回答者の属性、研修会の学び、本人・家族の思いを聴くために工夫していること、患者・家族の思いを聴くことの困難さ等とした。分析方法は、属性の部分は単純集計し、自由記載の部分は、意味内容の類似性に従い質的に分析した。

研修会参加者 49 名のうち 21 名から質問紙の回答が得られた（有効回答率 42.9%）。研修会の学びとしては【ライフストーリーを聴くことの意味がわかる】等が 10 あり、家族の思いを聴くために工夫していることは【話を聴くための姿勢をもつ】等の 8 つ、患者・家族の思いを聴くことの困難さとしては【信頼関係が築けていない中で踏み込んだ話が聴けない】等の 7 つがあった。またライフストーリーインタビューについては【ライフストーリーインタビューを取り入れる意味がある】等の 4 つがあり、研修会に関する意見として【ペアワークで聴き手・語り手の体験から学びを得た】等の 9 つがあった。

ライフストーリーの語りを生かした入退院支援の実践者育成に向けた課題として「ライフストーリーを語る本人との信頼関係の構築」「ライフストーリーの語りを聴く意味の理解と方法の習得」の 2 つが明確になった。ライフストーリーの語りを聴く意味も踏まえた、実践者育成の方策として「ライフストーリーの語りを聴くための知識の習得」「ライフストーリーの語りを聴くための実践的ワーク」「ライフストーリーの語りを生かした入退院支援の実践に向けた事例検討」の 3 つが検討された。

キーワード：ライフストーリーの語り、入退院支援、人材育成

I. はじめに

わが国では超高齢社会の中、医療提供体制が「医療機関完結型」から「地域完結型」に転換され、重度な要介護状態となっても住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生

の最後まで続けることができるよう、住まい・医療・介護・予防・生活支援が一体的に提供される「地域包括ケアシステム」の構築が推進されてきた。また 2018 年 3 月に厚生労働省は「人生の最終段階における医療・ケアの決定プロ

1) 岐阜県立看護大学 地域基礎看護学領域 Community-based Fundamental Nursing, Gifu College of Nursing

2) 福井県立大学 看護福祉学部 Faculty of Nursing and Social Work, Fukui Prefectural University

3) 関西医療看護大学 基礎看護学 Fundamental Nursing, KANSAI University of Nursing and Health Sciences

セスに関するガイドライン」を改訂し、アドバンス・ケア・プランニング（以下 ACP と示す）を「人生会議」と称して推奨している。ACP とは「人生の最終段階の医療・ケアについて、本人が家族等や医療・ケアチームと事前に繰り返し話し合うプロセス」と定義されている。そして ACP 実践のために、本人と家族等と医療ケアチームは対話を通し、本人の価値観・意向・人生の目標などを共有し、理解したうえで意思決定のために協働する共同意思決定（Shared Decision Making ; SDM）の実施が求められている（日本老年医学会倫理委員会「エンドオブライフに関する小委員会」, 2019）。

診療報酬改定に伴い医療機関の入退院支援の体制は整備されてきたが、看護職者が本人・家族の思いを聴くこと、意思決定に沿った支援を行うことは入退院支援を実践する上での継続的な課題であり、課題解決の方策を検討する必要がある（藤澤ら, 2019, 2020）。病いや障がいとともにある今後の生き方の意思決定を支援するためには、看護職者が本人・家族のこれまでの人生や真の思いを聴くことが不可欠であるが、看護職者は「本人・家族の思いを聴き受け止める」ことに困難を抱き、課題と捉えていた（加藤, 2022）。

またライフストーリーとは「生きてきた人生を語ることを選択した人が、できるかぎり完全にかつ率直に語った物語」であり、他者によってガイドされたインタビューの結果として語られる（黒江ら, 2016）。Atkinson は、「ストーリーを語ることによって今の自分に影響を及ぼしてきた様々な要因を整理、理解し、自分自身をよりよく捉え最終的には自己を受け入れやすくなる」「ライフストーリーを語ることは、人生に意味を与え、意味づけを必要とする過去の出来事を癒し、自己を受け入れる最も重要な方法である」と著している（Atkinson, 1995/2006, pp.22-23）。また小林（2022）は、「自己の経験を組織し、ライフストーリーとして物語ることは、エンパワメントされたり、カタルシスが表出されたり語り手自身に何らかの変化がもたらされて、そしてある種現在の自己肯定作用がある」と著している。先行研究でも、ライフストーリーを聴くことで、自分の人生をありのままに受け入れることができ、自分らしく生きたい思いを導き出した（細川ら, 2023）ことが示されていた。したがって病いや障がいによって変化を余儀なくされた人生を語ることで、自己を受け入れ、今後の自分らしい生き方を考え、その実現に向けて進むことができるようになると思われる。

そして入退院支援とは、病気の悪化や障がいによってこれまでの生き方からの変更を余儀なくされるなかで、病いや障がいをもちながら自分らしく生きる人生へと編み直しをするための支援である（藤澤, 2020）。看護職者が本人のライフストーリーの語りを聴くことにより、その人の自分らしく生きる人生を理解することができ、編み直しのための支援が可能になると考え、ライフストーリーインタビューを入退院支援に組み込むことに着目した。さらに、本人のライフストーリーの語りを聴く力の向上は、ACP における共同意思決定の際にも生かすことができ有意義であると考ええる。

しかし実際に、病いや障がいによりこれまで歩んできた人生の変革を余儀なくされる本人・家族は、すぐにその後の生き方を見出すことは難しい。そこで本研究では、本人の自分らしい生き方を支援できることに焦点を置いて、ライフストーリーインタビューの実践とリフレクションを繰り返しながら、ライフストーリーの語りを生かした入退院支援が実践できる看護職者の育成に取り組もうと考える。

本研究は、科学研究費助成事業基盤研究 C（課題番号：23K10238）「ライフストーリーの語りを生かした入退院支援の実践者育成モデルの開発」（2023 ～ 2025 年度）に基づく研究であり、方法 1 ライフストーリーインタビューの知識・技術習得のための教育支援、方法 2 本人・家族の思いを聴くことに焦点を当てた入退院支援のリフレクション、方法 3 ライフストーリーの語りを生かした入退院支援の実践者育成の取り組みの施行、方法 4 ライフストーリーの語りを生かした入退院支援の実践者としてのリフレクション、方法 5「ライフストーリーの語りを生かした入退院支援の実践者育成モデル」の開発を含む。なお、本稿は、方法 1 ライフストーリーインタビューの知識・技術習得のための教育支援に焦点を当てて、報告する。

Ⅱ. 研究目的

病いや障がいをもつ本人の自分らしい生き方を支援できるよう、ライフストーリーの語りを聴くことができ、それを生かした入退院支援が実践できる看護職者（以下実践者と示す）の育成が必要である。そこで本研究では、ライフストーリーインタビューの知識・技術習得のための教育支援として、A 県看護職者を対象に研修会を企画・開催し、参加者への質問紙調査により、ライフストーリーの語りを生かした入退院支援の実践者育成の課題を明確化し、ライフストーリーの語

りを生かした入退院支援の実践者育成の方策を検討する。

Ⅲ. 研究方法

ライフストーリーインタビューの知識・技術習得のための教育支援

1. ライフストーリーインタビューの知識・技術習得のための研修会の企画・開催

共同研究者間で研修内容を検討し、ライフストーリーインタビューの知識・技術習得のための研修会（以下研修会と示す）を企画した。

研修会参加対象者は、A 県の看護職者とし、県内 97 か所の医療機関の看護部長に、退院支援の推進に関わっている看護職者 3 名を選出して依頼文書を手渡してもらうよう依頼した。また、大学の実習施設の 1 つである A 県内の訪問看護ステーションの看護師 2 名から参加希望があった。研修会は自由意思による参加とし、参加者が話し合った内容は、データ化しないこととした。

2. 研修会の開催・参加者への質問紙調査の実施

A 県の看護職者を対象に研修会を開催し、研修会終了後に参加者に、研修会での学びと、入退院支援の中で本人・家族の思いを聴くことの現状を把握することを意図した質問紙調査を実施した。調査内容は、a 回答者の属性（年齢、看護師としての経験年数、所属部署）、b 研修会に参加したことによる学び、c 入退院支援の実践の中で本人・家族の思いを聴くために工夫していること、d 入退院支援の中で本人・家族の思いを聴くことの困難さ、e 入退院支援にライフストーリーインタビューを取り入れることについての意見、f 研修会に関する意見・感想とした。

分析方法として、質問紙調査票の記載内容のうち、属性等は単純集計した。自由記載の内容は、意味内容ごとの文脈に分けて要約し、質的に分析した。質的分析の妥当性については、共同研究者間で複数回検討を重ね、分析の真実性の確保に努めた。

Ⅳ. 倫理的配慮

研修会参加者には、本研究の目的・方法等を文書を用いて説明し、自由意思による研修会への参加をもって研究協力の同意を得たこととした。

質問紙調査の場合は、研究協力は個人の自由意思によるものとし、質問紙の返送をもって同意を得たこととすること、

質問紙は無記名であるため送付された質問紙の内容の削除は不可能となること、研究データおよび結果は研究の目的以外に用いることはないこと、また研究データの破棄の方法・時期等について明記した文書を用いて説明した。なお本研究は岐阜県立看護大学研究倫理委員会の承認を得ている（2023 年 7 月承認：承認番号 0337）。

Ⅴ. 結果

1. ライフストーリーインタビューの知識・技術習得のための研修会の企画・開催

1) 研修会の企画

共同研究者間で、ライフストーリーインタビューの知識・技術が習得できる研修会の企画・開催を目的に 6 回の検討会を開催した。1 回目の検討会では、ライフストーリーインタビューに関する Atkinson の文献（Atkinson, 1995/2006）を基盤に、文献の抄読を行い、ライフストーリーインタビューに関する知識を習得した。2 回目の検討会では、共同研究者が臨床現場で用いた研修プログラムを基に、研修内容を考案した。3 回目からは、研修内容、研修日程、依頼文書の発送準備等を順次進め、5 回目にはテーマを「長年にわたる療養生活を支えるためのライフストーリーインタビューを学ぶ」に確定し、6 回目には研修会の具体的な運営方法を検討した。

2) 研修会の開催

2024 年 3 月下旬に 49 名の看護職者の参加を得て、3 時間の研修会を開催した。参加者の所属部署は、病棟 32 名、外来 2 名、入退院支援担当部署 9 名、看護部 4 名、および訪問看護ステーション 2 名であった。研修会は、講義、実践的ワーク（ペアワーク、ロールプレイ・グループワーク）、振り返り内容の全体共有を取り入れて実施した。以下（ ）内は所要時間を示す。

(1) 講義

当該研修会ではまず「語りを聴く、そしてライフストーリー / 人生の語りを聴くために」の講義（25 分）を行った。内容には、ライフストーリー（人生の物語）とは、インタビューとは、語ることの意味、語りを支える基本的な技、ストーリーの共有の意味等を含めた。また「入退院支援における生活者として捉えることと語りを聴くことの重要性」の講義（15 分）では、入退院支援において生活者と捉えるとは、入退院支援において生活者と捉えた支援の意義、入退院支援の中

で語りを聴くことの意味等を含めた。

(2) 実践的ワーク

①ライフストーリーを語り・聴くペアワーク

参加者がお互いに語り手・聴き手となって「ライフストーリーを語り・聴く」ペアワークを実施した(20分)。その際、これまでの人生で嬉しかったこと、悲しかったこと、大切にしてきたこと、大切にしていきたいこと等を例示して、自身が語りたくないことは語らなくてもよいことを説明した。

その後2ペアの4名で、ライフストーリーを語る体験、聴く体験の振り返りとして、語りやすかったときの聴き手の様子(言葉や表情や姿勢)、語りにくかった時の聴き手の様子を共有した(10分)。

②ロールプレイ・グループワーク

ロールプレイには、「一人暮らしを続けたいと願う多系統萎縮症患者の入退院支援」の紙上事例を用いた。参加者4～5名のグループで役割決定(本人役、長男役、病棟看護師①役、病棟看護師②役等)をして、本人役のライフストーリーを聴くことを試みた(35分)。その後グループでその試みの振り返り(15分)を行い、自部署の退院支援にどのように生かせるかの検討を行った。

(3) 振り返り内容の共有・全体まとめ

参加者全体で、ペアワーク、ロールプレイ等の振り返り内容を報告し共有した。全体まとめでは、研究者がライフストーリーの語りを聴く意義を踏まえて、参加者の学びの講評を行った(35分)(図1)。

2. 研修会参加者への質問紙調査の実施

研修会終了後に参加者49名に、研修会での学びと、入退院支援の中で本人・家族の思いを聴くことの現状を把握することを意図して、自由意思による質問紙調査を依頼した。そして回答用紙は4週間後までに返信用封筒で返送してもらえよう説明した。その結果21名から回答が得られ、有効回答率は42.9%であった。

1) 質問紙調査回答者の属性

(1) 年齢

回答者の年齢は、20歳代が2名(9.5%)、30歳代が7名(33.3%)、40歳代が8名(38.1%)であり、50歳以上は4名(19.1%)であった。

(2) 看護職者としての経験年数

回答者の看護職者としての経験年数は、5年以上10年未満が5名(23.8%)、10年以上15年未満が4名(19.0%)、15年以上20年未満が8名(38.1%)、20年以上30年未満が3名(14.3%)、30年以上は1名(4.8%)であった。

(3) 所属部署

回答者の所属部署は、病棟が13名、外来が3名、入退院支援担当部署が6名、訪問看護ステーションが2名であり、内兼務者が3名であった。

2) 研修に参加しての学び(評定法)

回答者による研修での学びについての評定法の結果は、大変学びになった15名(71.4%)、やや学びになった6名(28.6%)、どちらでもない、あまり学びにならなかった、まっ

<p>テーマ「長期にわたる療養生活を支えるためのライフストーリーインタビューを学ぶ」</p> <p>1. オリエンテーション (5分)</p> <p>2. 講義</p> <p>1) 「語りを聴く」そして「ライフストーリー / 人生の語りを聴く」ために ・ライフストーリーインタビューの知と技 (R. アトキンソン) (25分)</p> <p>①「こころのドアをノックする」、②オープンエンドQとクローズドエンドQ、③うなづきとはげまし ④事柄への反映と感情への反映、⑤積極的肯定的関心&共感 (DVD 視聴)</p> <p>2) 退院支援における「生活者」として捉えることと語りを聴くことの重要性 (15分)</p> <p>3. 実践的ワーク</p> <p>1) ライフストーリーを語り・聴くペアワーク</p> <p>①自己紹介</p> <p>②「人生の語り / ライフストーリーを語る」ことの試み (2人ペア) (20分)</p> <p>・これまでの人生で嬉しかったこと、悲しかったこと、大切にしてきたこと、大切にしていきたいこと等</p> <p>③人生の語り / ライフストーリーを語ることの振り返り (4人グループ) (10分)</p> <p>・語りやすかったときの聴き手の様子 (言葉や表情や姿勢)</p> <p>・語りにくかったときの聴き手の様子 (言葉や表情や姿勢)</p> <p>2) ロールプレイ・グループワーク</p> <p>事例：一人暮らしを続けたいと願う多系統萎縮症患者の入退院支援</p> <p>ロールプレイ：Bさん、長男、病棟看護師① 病棟看護師② (病棟看護師③)</p> <p>①自己紹介・役割決定・事例の状況説明 (10分)</p> <p>②状況設定における「ライフストーリーを聴く」ことの試み (ロールプレイ) (35分)</p> <p>③「ライフストーリーを聴く」ことの試みの振り返り・自部署・自施設の退院支援にどのように生かせるか (15分)</p> <p>4. 振り返り内容の全体共有 (30分)</p> <p>5. 全体のまとめ (5分)</p>	
--	--

図1 ライフストーリーインタビューの知識・技術習得のための研修会の内容

たく学びにならなかったは0名であった。

3) 研修会に参加しての学び（自由記載）

質問紙調査の「研修会に参加しての学び」についての自由記載内容は47件あり、以下の10に分類された。なお以下の【 】は回答の自由記載内容の分析により抽出された分類を、〈 〉は小分類を示す。

研修会の参加の学びでは、人が語ることにについて〈人は必ず語ることができることがわかる〉〈語ることで自身に関心を持てるようになる〉等の【語ることの重要性がわかる】ことや、話してもらうための〈話せる環境を整えることが必要である〉〈時間を設けることが必要である〉の【話せる環境づくりの必要性がわかる】ことが示された。また〈相槌を打ちながら聴かれると話しやすくなる〉〈フィードバックしながら聴くことが重要である〉等の【話しやすくなる聴き方がわかる】こと、〈相手に関心を持つ姿勢で話を聴くことが大切である〉〈聴いてくれる人と感じてもらえるよう接する〉等の【話を聴く際に重要な姿勢がわかる】ことや、〈段階に分けて語ってもらい信頼関係を築くことが大切である〉の【信頼関係を築くことの大切さがわかる】ことが示された。またペアワークでの体験により〈語り手と聴き手の気持ちが変わり今後に生かせる〉〈待つ時間の大切さがわかる〉等の【語り手と聴き手双方の立場から学べる】ことや、〈話を聴くつもりが質問になる〉〈知りたい情報のみを聴いていることに気付く〉等の【自己の話の聴き方を振り返る機会になる】ことが示された。

またライフストーリーの語りを聴くことについて〈まず本人のライフストーリーに触れていくことがいかに重要か理解できた〉〈長期にわたる生活を支えるためにはまずは人生を自由に語ってもらうことが大切である〉等の【ライフストーリーを聴くことの意味がわかる】ことや、〈人生の語りを聴いてくれる人がいるから話すことができる〉〈語ってもらうためにライフストーリーインタビューの技術を会得することが重要である〉等の【ライフストーリーを語ってもらうために必要なことがわかる】ことが示された。そして講義も踏まえて〈本人を生活者と捉え病いを生活の一部として関わることが重要である〉〈その人らしく生活していけるよう生活者と捉え生活信条や価値観を理解する必要がある〉等の【生活者と捉える必要性がわかる】ことが学びとして示された（表1）。

4) 入退院支援の実践の中で本人・家族の思いを聴くために工夫していること

「入退院支援の実践の中で本人・家族の思いを聴くため

に工夫していること」についての自由記載内容は43件あり、以下の8つに分類された。

思いを聴くために工夫していることとして、〈傾聴する姿勢をもつ〉〈忙しい態度を見せない〉等の【話を聴くための姿勢をもつ】こと、〈今までの生活を知る〉〈本人・家族双方にこれまでの生活や今後の生活を聴く〉等の【これまでの生活・今後の生活への思いを聴く】ことが示された。また話を聴く際に〈深刻な場面でまずは本人に声をかける〉〈認知症の場合も本人に話しかける〉の【まず本人に話しかける】ことを心掛けており、〈本人と家族とは別な場所で聴く〉〈話しやすい内容から聴く〉等の【本人・家族個々の思いを語りやすいようにする】ことや、【重きをおくことを掘り下げて聴く】ことが示された。本人が話せないときは〈家族から本人の考えを聴く〉等【間接的に本人の思いを把握する】ことが示された。また〈語ることができる雰囲気づくりをする〉ことや〈ゆっくり話せる時間を作る〉等の【話を聴く環境を整える】ための工夫や、〈本人・家族の思いを聴き支援に生かす〉〈不安を聴き多職種の介入を促す〉等の【聴いたことを支援に生かす】ようにしていることが示された（表2）。

5) 入退院支援の実践の中で本人・家族の思いを聴くことの困難さ

「入退院支援の実践の中で本人・家族の思いを聴くことの困難さ」についての自由記載内容は44件あり、以下の7つに分類された。

思いを聴くことの困難さとして、〈本人が自分のことを話さない〉〈病状により本人の思いが聴けない〉等の【本人の状況により思いを聴くことが難しい】こと、〈家族に直接会って話すことができない〉等の【家族と直接会えないことにより思いを聴くことが難しい】ことや、〈本人の思いより家族の思いが優先される〉等【本人の思いが優先されない】現状があることが示された。また〈本人・家族の思いの方向性が違う〉〈本人・家族の関係性がわからず踏み込めない〉等の【本人・家族の思いを聴いても対応が難しい】こと、〈信頼関係を築く前に踏み込んだ話を聴くことに戸惑いを感じる〉〈信頼関係が築けていない状態で質問攻めにしてしまう〉等の【信頼関係が築けていない中で踏み込んだ話が聴けない】ことが示された。また聴き手となる看護職者が〈語りを聴く準備が必要である〉等の【自分に心の余裕がないと話を聴くことは難しい】ことや、〈限られた時間の中でじっくり話が聴けない〉〈多忙で話が聴けない〉等の【時間が取

表1 研修会に参加したことによる学び

n=21

分類	小分類
語ることの重要性がわかる (8)	人は必ず語ることができることがわかる (2)
	語ることで自身に関心を持てるようになる (2)
	語ってもらうことで本当の思いや希望を知ることができる (2)
	聴きたいことにとらわれず語ってもらうことが重要である (2)
話せる環境づくりの必要性がわかる (3)	話せる環境を整えることが必要である (2)
	時間を設けることが必要である (1)
話しやすくなる聴き方がわかる (7)	相槌を打ちながら聴かれると話しやすくなる (5)
	ゆっくり時間を作り聴くと話しやすくなる (1)
	フィードバックしながら聴くことが重要である (1)
話を聴く際に重要な姿勢がわかる (6)	相手に関心を持つ姿勢で話を聴くことが大切である (2)
	聴いてくれる人と感じてもらえるよう接する (1)
	生活の視点をもって語りを聴くことが大切である (1)
	相手の大切にしていることを知ることなどが重要である (1)
信頼関係を築くことの大切さがわかる (3)	自分の得たい情報を聞き出すのではなく傾聴することが大切である (1)
	段階に分けて語ってもらい信頼関係を築くことが大切である (3)
語り手と聴き手双方の立場から学べる (6)	語り手と聴き手の気持ちが変わり今後に生かせる (2)
	実際にライフストーリーを語り・語ってもらうことで相手の話し易い聴き方が学べた (1)
	待つ時間の大切さがわかる (1)
	語りを語れる・聴くことができると考えた (1)
	最初の質問が難しかった (1)
自己の話の聴き方を振り返る機会になる (3)	話を聴けているか振り返りができた (1)
	話を聴くつもりが質問になる (1)
	知りたい情報のみを聴いていることに気付く (1)
ライフストーリーを聴くことの意味がわかる (4)	ライフストーリーを聴くことの意味やその人らしく生きる支援について考えを深めた (1)
	まず本人のライフストーリーに触れていくことがいかに重要か理解できた (1)
	長期にわたる生活を支えるためにはまずは人生を自由に語ってもらうことが大切である (1)
	ライフストーリーを聴くことで信頼関係を築くことができる (1)
ライフストーリーを語ってもらうために必要なことがわかる (3)	本人のライフストーリーを語ってもらうための環境や時間が必要である (1)
	人生の語りを聴いてくれる人がいるから話すことができる (1)
	語ってもらうためにライフストーリーインタビューの技術を会得することが重要である (1)
生活者と捉える必要性がわかる (4)	本人を生活者と捉え病いを生活の一部として関わることが重要である (1)
	その人らしく生活していけるよう生活者と捉え生活信条や価値観を理解する必要がある (1)
	対象を生活者と捉えることが不足していた (1)
	入院期間を人生のページとしての線ではなく点と捉えていた (1)

() 内は件数を示す

れずじっくり話が聴けない】現状があることが示された(表3)。

6) 入退院支援にライフストーリーインタビューを取り入れることへの意見

「入退院支援にライフストーリーインタビューを取り入れることへの意見」についての自由記載内容は36件あり、以下の4つに分類された。

ライフストーリーインタビューを取り入れることへの意見として、〈ライフストーリーを聴くことは意思決定支援につながる〉〈今までの生き方や価値観を知るためにライフストーリーが重要になる〉等の【ライフストーリーインタビューを取り入れる意味がある】こと、〈日常生活支援の場面で取り入れてコミュニケーションを図る〉〈会話の中でライフストーリーが聴けるようにスキルアップしたい〉等の【ライフストーリーインタビューをケアの中に取り入れたい】ことが示された。ライフストーリーインタビューの時期として〈在宅看取りの希望等について入院時に話ができることよい〉等の【入院時にライフストーリーイ

ンタビューができるとよい】ことが示されたが、〈実践したいと思うが時間が取れない〉〈その人を知るうえで大切と思うが時間が取れない〉等の【ライフストーリーインタビューの時間が取れない】現状も示された(表4)。

7) 研修会に関する意見・感想

「研修会に関する意見・感想」についての自由記載は27件あり、以下の9つに分類された。

実践的ワークへの意見として、〈語りやすい聴き方の体験ができた〉〈聴くこと、聴かれることの大切さを学んだ〉等の【ペアワークで聴き手・語り手の体験から学びを得た】こと、〈ロールプレイで本人・家族の思いがわかった〉〈ロールプレイをすることで、行動を振り返ることができた〉の【ロールプレイで本人・家族の立場から振り返りができた】こと、【ロールプレイの情報が不足していた】ことが示された。グループワークで意見交換したことによる【多施設の看護職との交流により学べた】ことも示された。研修会の企画に関しては、【学

表2 入退院支援の実践の中で本人・家族の思いを聴くために工夫していること

n=21

分類	小分類
話を聴くための姿勢をもつ (8)	傾聴する姿勢をもつ (3)
	先入観を持たない (1)
	忙しい態度を見せない (1)
	態度に気を付ける (1)
	支援する姿勢を示す (1)
	非言語的コミュニケーションを大事にする (1)
これまでの生活・今後の生活への思いを聴く (6)	今までの生活を知る (1)
	本人に今後の生活への思いを聴く (2)
	家族に本人の退院後の生活を感じてもらう (2)
まず本人に話しかける (2)	本人・家族双方にこれまでの生活や今後の生活を聴く (1)
	深刻な場面でまずは本人に声をかける (1)
	認知症の場合も本人に話しかける (1)
本人・家族個々の思いを語りやすいようにする (10)	本人と家族とは別な場所で聴く (3)
	話しやすい内容から聴く (2)
	世間話の中で本人の人柄等を聴く (1)
	対面で話を聴く (2)
	口調・相槌等優しい感じになるよう心がける (1)
重きをおくことを掘り下げて聴く (2)	反復、沈黙等を取り入れて語るタイミングを逃さない (1)
	重きをおくことを掘み掘り下げて聴く (2)
間接的に本人が思いを把握する (3)	家族から本人の考えを聴く (2)
	患者情報シートから本人・家族の思いを知る (1)
話を聴く環境を整える (9)	語ることができる雰囲気づくりをする (2)
	落ち着いて話せるよう場所を配慮する (3)
	ゆっくり話せる時間を作る (3)
	家族に確認したいことをメモして聴く (1)
聴いたことを支援に生かす (3)	本人・家族の思いを聴き支援に生かす (1)
	不安を聴き多職種の介入を促す (1)
	相談場所を紹介する (1)

() 内は件数を示す

表3 入退院支援の実践の中で本人・家族の思いを聴くことの困難さ

n=21

分類	小分類
本人の状況により思いを聴くことが難しい (8)	今後の療養生活のイメージができていない (2)
	本人が自分のことを話さない (2)
	病状により本人の思いが聴けない (2)
	認知症のある本人・家族の思いが判断できない (1)
	終末期の本人・家族への声掛けができない (1)
家族と直接会えないことにより思いを聴くことが難しい (5)	家族に直接会って話すことができない (3)
	家族に電話で本心を聴くことは難しい (2)
本人の思いが優先されない (4)	本人の思いより家族の思いが優先される (3)
	面談時等に本人の同席と発言を促したい (1)
本人・家族の思いを聴いても対応が難しい (9)	本人・家族の思いの方向性が違う (5)
	本人・家族の思いの方向性が変わる (1)
	本人・家族の関係性がわからず踏み込めない (2)
	本人の望む治療が実際に可能と思えない (1)
信頼関係が築けていない中で踏み込んだ話が聴けない (7)	信頼関係を築く前に踏み込んだ話を聴くことに戸惑いを感じる (4)
	信頼関係が築けていない状態で質問攻めにしてしまう (2)
	関係性の構築が必要である (1)
自分に心の余裕がないと話を聴くことは難しい (4)	自分に心の余裕がないと話を聴くことは難しい (3)
	語りを聴く準備が必要である (1)
時間が取れずじっくり話が聴けない (7)	思いを聴く場を設けていない (1)
	多忙で話が聴けない (1)
	限られた時間の中でじっくり話が聴けない (5)

() 内は件数を示す

びのあるプログラムだった】【ライフストーリーインタビューの技術を学びたい】【ライフストーリーインタビューを取り込みたい】との意見が示された。その他に【研修会を継続して

もらいたい】【研修会の位置づけがわかりにくかった】との意見も示された (表5)。

表4 入退院支援にライフストーリーインタビューを取り入れることへの意見

n=21

分類	小分類
ライフストーリーインタビューを取り入れる意味がある (19)	ライフストーリーを聴くことは意思決定支援につながる (2)
	本人の思いなど深く知ることができる (3)
	今までの生き方や価値観を知るためにライフストーリーが重要になる (3)
	本人の人生を意味づけることができる (3)
	本人と信頼関係を築くことができる (2)
	その人らしい退院後の生活に向けた支援ができる (5)
ライフストーリーインタビューをケアの中に取り入れたい (7)	ライフストーリーインタビューは重要で必要である (1)
	日常生活支援の場面で取り入れてコミュニケーションを図る (2)
	会話の中でライフストーリーが聴けるようにスキルアップしたい (1)
	面談の時にライフストーリーインタビューができるとよい (1)
	聴いた内容を家族にも伝えていけるとよい (1)
入院時にライフストーリーインタビューができるとよい (3)	ケアの中でライフストーリーインタビューを取り入れるのは容易である (1)
	ライフストーリーインタビューを知ってもらいたい (1)
	転入時改めて本人・家族の思いを聴くとよい (2)
ライフストーリーインタビューの時間が取れない (7)	在宅看取りの希望等について入院時に話ができるとよい (2)
	実践したいと思うが時間が取れない (4)
	方向性を決めやすいが実際は時間が取れない (1)
	その人を知るうえで大切と思うが時間が取れない (1)
	家族の来院日に時間調整ができず直接話をするのが難しい (1)

() 内は件数を示す

表5 研修会に関する意見・感想

n=18

分類	小分類
ペアワークで聴き手・語り手の体験から学びを得た (6)	語りやすい聴き方の体験ができた (4)
	自分のことを語ることの意義が体験できた (1)
	聴くこと、聴かれることの大切さを学んだ (1)
ロールプレイで本人・家族の立場から振り返りができた (4)	ロールプレイで本人・家族の思いがわかった (2)
	ロールプレイをすることで、行動を振り返ることができた (2)
ロールプレイの情報が不足していた (2)	ロールプレイは情報が不足していた (2)
多施設の看護職との交流により学べた (5)	多施設の現状や考え方を聴くことができた (2)
	色々な年代・立場の人と交流ができ勉強になる (3)
学びのあるプログラムだった (3)	興味があることだったので学べた (1)
	学びのある研修であった (2)
ライフストーリーインタビューの技術を学びたい (2)	もう少しライフストーリーインタビューの技術を学びたい (2)
ライフストーリーインタビューを取り込みたい (1)	ライフストーリーインタビューを取り込みたい (1)
研修会を継続してもらいたい (2)	退院支援の実践力維持のために研修を継続してもらいたい (1)
	また参加したい (1)
研修会の位置づけがわかりにくかった (2)	研修会の位置づけがわかりにくかった (2)

() 内は件数を示す

VI. 考察

「ライフストーリーインタビューの知識・技術習得のための研修会」実施後に、自己の看護実践の中で語りを聴くことについて振り返って回答された質問紙調査の結果より、ライフストーリーの語りを生かした入退院支援の実践者育成に向けた課題を明確にし、ライフストーリーの語りを聴くことの意味、実践者育成の方策を検討する。

1. ライフストーリーの語りを生かした入退院支援の実践者育成に向けた課題

ここでは、当該研修会参加者を実践者と位置付け、ライフストーリーの語りを聴くことに焦点を当てて、実践者育成に向けた課題を検討する。

1) ライフストーリーを語る本人との信頼関係の構築

実践者は、本人がどのような状況に置かれていても【まず本人に話しかける】工夫をしているが、病状により思いが聴けない等【本人の状況により思いを聴くことが難しい】場合がある。また、【本人・家族個々の思いを語りやすいようにする】ことで、それぞれの思いを把握できたとしても、【本人の思いが優先されない】現状がある。そして本人と家族の思いの方向性が違う場合【本人・家族の思いを聴いても対応が難しい】現状があることが分かった。その中でも実践者は【話を聴くための姿勢をもつ】ことや、語ることができる雰囲気づくりをして【話を聴く環境を整える】工夫をしていた。しかし【信頼関係が築けていない中で踏み込んだ話

が聴けない】と捉えており、研修会での学びの中でも【信頼関係を築くことの大切さがわかる】ことが示されていた。したがって、本人に話を聴くことが難しい現状の中で、本人にライフストーリーを語ってもらうためには、「ライフストーリーを語る本人との信頼関係の構築」が必要であり、実践者育成に向けた1つ目の課題であると考える。

2) ライフストーリーの語りを聴く意味の理解と方法の習得

実践者は、入退院支援に必要な【これまでの生活・今後の生活への思いを聴く】ことを実践しており、【聴いたことを支援に生かす】よう工夫していることが分かった。一方で看護職者は【時間が取れずじっくり話が聴けない】ことや、【自分に心の余裕がないと話を聴くことは難しい】と、語りを聴くことに困難さを抱えていることが分かった。研修会での学びとして、【語ることの重要性がわかる】ことが示され、【話しやすくなる聴き方がわかる】では、相槌を打つことや、フィードバックしながら聴くこと等、語りやすくする方法を学んでおり、今後その方法を実践することにより、語りを聴くことの困難さは軽減されることが考えられる。

さらに研修会参加の学びの【ライフストーリーを聴くことの意味がわかる】では、〈まず本人のライフストーリーに触れていくことがいかに重要であるかが理解できた〉ことや、【ライフストーリーを語ってもらうために必要なことがわかる】では、〈人生の語りを聴いてくれる人がいるから話すことができる〉等、聴き手の重要性も学んでいた。

したがって、今後ライフストーリーの語りを聴けるようになるためには「ライフストーリーの語りを聴く意味の理解と方法の習得」が必要となり、実践者育成に向けた2つ目の課題であると考えられる。

2. ライフストーリーの語りを聴き入退院支援に生かすことの意味

先行研究において、2019年のA県の医療機関の看護部長・退院調整看護師の捉えた医療機関の看護職者が取り組む課題として「患者・家族のこれまでの人生や今後の生き方への意思を捉え、患者・家族の意思決定に沿った計画的・継続的支援」等の4つが明確になった（藤澤ら、2019）。さらに入退院支援の質向上に向け病棟看護師が取り組む課題として「患者・家族の意思のずれをなくしその人らしい生活を送るための意思決定支援」等の8つが明確になった（藤澤ら、2020）。したがって入退院支援の実践者は、本人・家族の意思や、これまでの人生や今後の生き方へ

の意思を捉えて支援に生かすことを課題と捉えていた。

当該研修会に参加した実践者は、ライフストーリーを聴くことの意味として、〈まず本人のライフストーリーに触れていくことの重要性を理解し（た）〉、〈ライフストーリーを聴くことで信頼関係を築くことができる〉ことを捉えていた。

ライフストーリーの語りを上手に聴くことは、本人の人生やストーリーに思いやりを示し、尊敬したたえるということであり、語り手の話をしっかり聴くことによって語り手との間に信頼関係が生まれ、より深い話を聴くことができるようになる。話を聴くことの困難さでも示されていたように、日々の煩雑な看護実践の中で、話を聴く必要性はわかっているが、じっくり話を聴く時間が取れないとジレンマを感じている実践者が多くいると考える。短時間でもその人の人生に関心を持ち、現在の思いや、これまでの人生を尊重しながら聴くことで、より深くその人を知ることができ、信頼関係の構築に繋がる。

同時に、〈長期にわたる生活を支えるためには人生を自由に語ってもらうことが大切である〉ことや、〈本人の人生を意味づけることができる〉ことも捉えており、ライフストーリーを入退院支援に取り入れることにより、本人のこれまでの人生を意味づけることにつながり、その人らしい退院後の生活に向けた支援に生かせると考える。先行研究においても、生活史の中で培われてきたこれまでの生活信条や価値観を大切にすること、生活信条や価値観が根底にある本人の判断や考えを尊重して関わることは、退院後のその人の生活の様々な側面を形づくる退院支援において、これまでの生き方から連続するこれからの生き方を支援する重要な意味をもつ（加藤ら、2024）ことが示されている。

したがってライフストーリーの語りを聴くことにより、本人のこれまでの人生や生活信条・価値観等を共有することができ、本人との信頼関係が構築されることで、病いや障がいとともにある本人の、今後の自分らしい生き方への支援にもつながると考える。

3. ライフストーリーの語りを生かした入退院支援の実践者育成の方策の検討

上記で明確化した、実践者を育成する上での課題である「ライフストーリーを語る本人との信頼関係の構築」「ライフストーリーの語りを聴く意味の理解と方法の習得」の解決に向け、研修会の成果を含めて、実践者育成に向けた方策を検討する。

1) ライフストーリーの語りを聴くための知識の習得

当該研修会ではまず「語りを聴く、そしてライフストーリー / 人生の語りを聴くために」の講義を行い、「ライフストーリー (人生の物語) とは」、「インタビューとは」、「語ることの意味」 「語りを支える基本的な技」を説明し、ライフストーリーインタビュー方法に関する知識を提供した。またライフストーリーの語りを聴くにあたっては、本人や家族を生活者として捉え、これまでの人生や、未来の人生についてプロセスとして捉える必要があり、「入退院支援において生活者と捉えた支援の意義」、「入退院支援の中で語りを聴くことの意味」等を含めた。

その成果として【語ることの重要性がわかる】ことや【ライフストーリーを聴くことの意味がわかる】ことにつながっており、また入院期間も含めた人生を点ではなく線としてつなげて捉えるよう認識し【生活者と捉える必要性がわかる】ことが示されていた。したがって、講義等により本人を生活者と捉え、ライフストーリーの語りを聴くことの意味をまず理解することが必要であり、ライフストーリーの語りを聴くための確実な知識の習得の機会が必要であると考ええる。

2) ライフストーリーの語りを聴くための実践的ワーク

(1) 語り手と聴き手の立場に立って実際にライフストーリーの語りを聴く実践

研修会では、参加者がお互いに語り手・聴き手となって「ライフストーリーを語り・聴く」ペアワークを実施し、2ペアの4名でライフストーリーを語る体験、聴く体験の振り返りを行った。

研修会参加による学びの中に【話しやすくなる聴き方がわかる】ことや【話を聴く際に重要な姿勢がわかる】こと、【語り手と聴き手双方の立場から学べる】ことが示されており、研修会への意見の中にも【ペアワークで聴き手・語り手の体験から学びを得た】ことが示されていた。

実践者は、自身のライフストーリーを語る際に、〈人生の語りを聴いてくれる人がいるから話すことができる〉ことや、〈相槌を打ちながら聴かれると話しやすくなる〉こと等を体験していた。そして今後、体験を生かして語りを聴くことにより、今まで困難と感じていた【信頼関係が築けていない中で踏み込んだ話が聴けない】思いも変化すると考える。したがって、語りを聴く困難さを払拭する意味でも、ライフストーリーの語りを聴くための実践的ワークが効果的であると考ええる。そして語りを聴く技術を習得することにより、さらに本人への関心が高まり信頼関係の構築ができると考える。

(2) 自己の話の聴き方を振り返るリフレクション

研修会でのペアワークやグループワークにより、【自己の話の聴き方を振り返る機会になる】ことや、【多施設の看護職との交流により学べた】ことも分かった。自身だけでは気づけないこともグループの複数人で振り返ることにより、〈話を聴くつもりが質問になる〉ことや、〈知りたい情報のみを聴いていることに気付く〉機会になっていた。したがって、ライフストーリーの語りを聴くための実践的ワークの中に、必ず体験をリフレクションする機会を設ける必要があると考える。

小山 (2022) は、リフレクションを「経験や看護実践を通して感じる違和感や気がかりを自覚し、支援者の元で経験を語り、自己を客観視することで視野が拡大し、課題を発見して成長し、意識変容と行動変容をもたらす一連の思考過程」と定義し、「リフレクションから得られるものは自分自身と向き合うことによる個人の成長であり、その先の行動変容までを求めている」と述べている。

本研修会での実践的ワークは短時間であったが、今後の実践の中でライフストーリーの語りを聴く実践を積み重ね、リフレクションの機会をもつことにより、実践者の意識変容と行動変容をもたらすことができ、実践者の育成につながると考える。

3) ライフストーリーの語りを生かした入退院支援の実践に向けた事例検討

研修会では、ライフストーリーの語りを入退院支援に生かす試みとして、退院支援事例のロールプレイを取り入れた。本人・家族・看護師の立場になりライフストーリーを聴くことを試みたのち、グループでその試みの振り返りを行い、自部署の退院支援にどのように生かせるかの検討を行った。その結果【ロールプレイで本人・家族の立場から振り返りができた】ことが分かった。そして本人に語ってもらうことで、〈本人の思いなど深く知ることができる〉等、真の思いや今後に向けた希望を知ることができ、〈その人らしい退院後の生活に向けた支援ができる〉等、本人の望むその後の人生への支援につなげるための検討ができることを学んでいた。実際に各部署においては、ライフストーリーの語りの内容を基に、支援方法を検討する事例検討の機会を設けることで、ライフストーリーの語りを生かした入退院支援の実践につながると考える。

また上記「ライフストーリーの語りを聴くための知識の習得」「ライフストーリーの語りを聴くための実践的ワーク」「ライフ

ストーリーの語りを生かした入退院支援の実践に向けた事例検討」の方策を教育支援に取り入れることにより、実践者育成に向けた課題である「ライフストーリーを語る本人との信頼関係の構築」「ライフストーリーの語りを聴く意味の理解と方法の習得」の解決につながり、ライフストーリーの語りを生かした入退院支援の実践者育成が可能となると考える。

VII. 結論

ライフストーリーインタビューの知識・技術習得のための研修会を企画・開催し、振り返って回答された質問紙調査の結果より、ライフストーリーの語り生かした入退院支援の実践者育成に向けた課題として「ライフストーリーを語る本人との信頼関係の構築」「ライフストーリーの語りを聴く意味の理解と方法の習得」の2つが明確になった。

ライフストーリーの語りを聴くことは、実践者にとっては、本人との信頼関係が構築され、本人の自分らしい生き方への支援が可能となる。またライフストーリーを入退院支援に取り入れることにより、本人のこれまでの人生を意味づけすることにつながり、その人らしい退院後の生活に向けた支援に生かせると考える。

上記を踏まえ、ライフストーリーの語りを生かした入退院支援の実践者育成の方策として、「ライフストーリーの語りを聴くための知識の習得」「ライフストーリーの語りを聴くための実践的ワーク」「ライフストーリーの語りを生かした入退院支援の実践に向けた事例検討」の3つが検討された。

本研究は2023年～2025年度JSPS科研費23K10238による助成を受けて実施した。

本研究における利益相反はない。

文献

- Atkinson, R. (1995/2006). 塚田守(訳), 私たちの中にある物語 — 人生のストーリーを書く意義と方法 —. ミネルヴァ書房.
- 藤澤まこと編集. (2020). ナースが行う入退院支援患者・家族の「その人らしく生きる」を支えるために(第1版)(pp.15). メヂカルフレンド社.
- 藤澤まこと, 渡邊清美, 加藤由香里ほか. (2019). 利用者ニーズを基盤とした退院支援の質向上に向けた人材育成システムの構築(第1報) —医療機関の看護職者が取り組む退院支援の課題の明確化—. 岐阜県立看護大学紀要, 19(1), 157-98.

藤澤まこと, 渡邊清美, 加藤由香里ほか. (2020). 退院支援の質向上に向け病棟看護師が取り組む課題の検討. 岐阜県立看護大学紀要, 20(1), 145-155.

細川忍, 中田宣人, 奥山真由美. (2023). 悪性胸膜中皮腫患者の病の軌跡と人生の終焉に向かう語りの分析 —ナラティブ・アプローチを用いた意思決定支援—. 日本看護学会誌, 18(1), 179-185.

加藤由香里. (2022). 患者と家族の思いに沿った退院支援 その3 —退院支援の実践上の課題の明確化及び改善に向けた方策の考案—. 岐阜県立看護大学紀要, 22(1), 15-26.

加藤由香里, 藤澤まこと, 黒江ゆり子. (2024). 退院支援における生き方の尊重に関する論考 —「生活者」として捉えた支援および「意思決定支援」に焦点をあてて. 岐阜県立看護大学紀要, 24(1), 117-124.

小林多寿子. (2022). 第2章 ライフストーリー・インタビューをおこなう. 桜井厚, 小林多寿子(編), ライフストーリー・インタビュー 質的研究入門(第6刷)(p.117). せりか書房.

黒江ゆり子, 藤澤まこと. (2016). 慢性の病いにおける事例研究法とライフストーリーインタビュー法の意義と方法についての論考. 岐阜県立看護大学紀要, 16(1), 106-111.

日本老年医学会倫理委員会「エンドオブライフに関する小委員会」. (2019). 「ACP推進に関する提言」(第1版)(p.2). 日本老年医学会.

小山理英. (2022). 看護におけるリフレクションの概念分析 Walker&Avantの手法を用いて. 伝統医療看護連携研究, 3(2), 102-113.

(受稿日 令和6年8月20日)

(採用日 令和7年1月6日)

Consideration of Measures to Train Practitioners to Support Hospital Admissions and Discharges by Utilizing Life Story Narratives

Makoto Fujisawa¹⁾, Yukari Kato¹⁾, Machiko Shibata¹⁾, Sanae Fusho²⁾ and Yuriko Kuroe³⁾

1) Community-based Fundamental Nursing, Gifu College of Nursing

2) Faculty of Nursing and Social Work, Fukui Prefectural University

3) Fundamental Nursing, KANSAI University of Nursing and Health Sciences

Abstract

In this study, a training session was conducted for nurses in Prefecture A to enhance their knowledge and skills in conducting life story interviews. A questionnaire survey was used to identify challenges in training practitioners who support hospital admission and discharge through life storytelling and to explore effective training methods. The session included lectures and practical exercises, followed by a survey assessing participants' attributes, knowledge gained, efforts to listen to patients and their families, and challenges encountered. The analysis involved aggregating respondent attributes and qualitatively categorizing free-text responses based on semantic similarity. Of the 49 participants in the training session, 21 completed the questionnaire (valid response rate: 42.9%). Feedback from the training session included ten comments similar to "I learned the meaning of listening to life stories." Eight comments highlighted efforts to listen to families, such as "Having a good listening attitude." Additionally, seven comments highlighted challenges in listening to patients and families, such as "I can't engage in in-depth conversations when a relationship of trust hasn't been established." Regarding the life story interviews, four comments noted "There is merit in incorporating life story interviews." Nine comments reflected on the training session itself, including "I learned from the experiences of both the listener and the narrator through pair work." Two key challenges were identified in training practitioners: building trust with individuals sharing their life stories and understanding the significance and appropriate methods of listening to these stories. To address these challenges, three strategies were examined: acquiring knowledge about listening to life stories, engaging in practical listening exercises, and utilizing case studies on admission and discharge support through life storytelling.

Key words: life storytelling, hospital admission, hospital discharge support, human resource development